

ヤング、ハスバン、ド氏と語る

原氏と會合

二十七日午前七時四十分發、路は東南を指して平坦、西南は一帶沼澤地に屬し、部落相運り、人家次第に多く、十一時三十分、行程約十二哩、スリナガルに達す。予は市街を縦貫して、居留地ハリシンバク街に到り、先づ英國駐在官大佐ヤング、ハスバン、ド氏を其の官邸に訪問せり。大佐は千九百〇六年、西藏遠征隊長を以て、中外を轟かせし人、嘗て其の大尉たりし時、滿州、蒙古、新疆横斷の大旅行を果せし人、今や重任を帯びてカシミヤ王國の首府に駐在す。大佐身長高からざるも、能く肥滿し、温乎たる狀貌、諄々たる言語、親しむべく、敬すべく、遠に有名の遠征家丈、少からぬ同情を以て予を迎へられしを感謝す。予は副官の言に依り、稻垣中佐の未着を確め、辭して「ハウス、ボート」(幅十尺長さ八十餘尺、船内居室、食堂、寢室、浴室等に分ち)に投宿せしが、日將さに暮れんとする頃、孟買なる藤田領事派遣の原雀鷹氏(略什噶爾より)は、英語通譯一人の周旋を依頼し置けり。是に於て領事は氏を送りしもの蓋し、氏は有名なる慈善家、原胤昭氏の次男、年齒僅に二十歳、商業視察の爲め深く印度内地に入り、土人と起居を共にし、當時印度語の研(す)の來訪するに會ひ、相見て歡然恰も舊知の如し。時に船傍人山を築く。蓋し此地日本人を見ること甚だ稀なればなり。而して其夕刻原氏に導かれ、特に予が爲めに準備せる「ハウスボート」に轉宿す。